



日本百名山 登山日記

歩みを止めなければ、いずれ頂に辿り着く、そんな山日記です



vol.44 トムラウシ山（日本百名山 60/100）

登山につきまとう恐怖とは何か？ 登山をしていない人から、「一人で山に行くのは怖くないですか？」とよく聞かれます。答えは、正直、めちゃくちゃ怖いです。滑落事故や遭難、低体温症、怪我など不安を挙げればキリがなく、本当に登山するたびに恐怖しかありません。

また山は、有史以前から人々が崇め祀る御神体であり畏怖の対象でもあるため、それぞれの山には逸話や怪談話などがあり、それを聞いたら一人で深夜の山に入りたくないと思わせるに十分過ぎる恐怖があります。

また、歩いていると、ここで過去に遭難して何人も亡くなったとかの情報が頭をよぎることもあり、そうなるともう最悪です。今回登ったトムラウシ山も、2009年7月16日 8名が低体温症で命を落とす遭難事故が発生、また2015年7月8日には単独登山の男性が凍死により亡くなられています。

ただ、それは単に頭をよぎるだけであり、また遭難の類は十分な事前準備と体力・技術力、知識の向上でかなりの部分を防げるので、自分自身で恐怖心は減らすことができます。

では、何が怖い。一番は天候の急変などですが、ここでは最近話題になっている「熊」が怖いと敢えて記します。



前トム平から登った地点よりトムラウシ山 山頂を望む

なぜ、敢えてと記したかと言うと、これだけ登山していても、まだ二回しか熊に出会ったことがないので、対策グッズの持参、熊の知識の習得、またその性質から登山中にどういう状況なら出会う可能性があるなど、素人レベルですがなんとなくわかってきたからです。

ただ、それでも怖い事には変わりありませんが、精神衛生を保つため、今は出会えたらラッキーぐらいの気持ちで山に入るようにしています。

でも、やっぱり怖いものは怖いんです。人の多いアルプス界隈より西の山は、それほど神経を尖らすことは無いですが、ツキノワグマであれば秋田県、岩手県、青森県の県境付近、そして北海道のヒグマです。一般的には登山者が襲われている数は、ツキノワグマ > ヒグマとなります。

当然、生息数や登山者数が違うので遭遇率にも違いがあり同一的に見ることは出来ませんが、やはり本州に住む人間としては、巨大なヒグマは恐怖しかありません。

さて、熊の話は専門家ではないので詳細は話せませんが、北海道での登山ではヒグマの生態をしっかりと理解しておく必要があります。今回、登ったトムラウシ山はヒグマの目撃情報には事欠かず、私が登山する前の週にも目撃情報がありました。

北海道にある日本百名山は9座、今後はヒグマの巣窟のと言われる日高山脈の幌尻岳や知床半島の羅臼岳など、遭遇確率が非常に高い山域にも登る事になるので、それなりの覚悟を持って挑戦しようと思っています。

さて、熊の話はここで一旦、終わらせてもらいますが、何にせよ、登山の恐怖の一つに熊との遭遇があることは間違いないですし、登山中は頭の中からその存在が消えることはありませんので、非常にメンタルは鍛えられると思っています。



ヒグマの目撃が多いトムラウシ公園

では、今回登ったトムラウシ山について説明します。

トムラウシ山は標高2,000m級の山々が連なる大雪山系にあり、北海道のほぼ中央に位置しています。大雪の奥座敷と称され、その美しい風景は「カムイミントラ（神々の遊ぶ庭）」とも呼ばれます。標高は2,141mとそれほど高くはありませんが、気象的な要素を考えれば、北海道の山は本州の山+1,000mの気持ちで挑む必要があると言われていています。トムラウシ山は深山であることから、広大な花畑や湖沼などが荒らされる事無く残っている非常に美しい山です。また、溶岩台地に大きな岩が積み重なった「ロックガーデン」と呼ばれる一帯があり、ナキウサギの生息地となっているらしいのですが、残念ながら今回の登山では会うことが出来ませんでした。

尚、「トムラウシ」の語源は、アイヌ語の「トムラ・ウツ・イ」（緑色の藻が群生するところ：水垢の多い川）を意味しています。トムラウシ山を源流とするトムラウシ川を指した言葉で、温泉鉱物のため水がヌラヌラしていることから、この名前がついたと言われていています。

深田久弥は、著書 日本百名山でトムラウシ山について以下のように記しています。

「トムラウシを眺めて初めて打たれたのは十勝岳からであった。美瑛富士の頂上から北を見ると、尾根の長いオプタケシの彼方に、ひときわ高く、荒々しい岩峰を牛の角のようにもたげたダイナミックな山がある。それがトムラウシであった。それは私の心を強く捕らえた。あれに登らねばならぬ。私はそう決心した。その次、大雪山の最高峰 旭岳の頂上から今度は南の方に、快晴の秋空に屹と立っているトムラウシを見た。やはり立派であった。威厳があって、超俗のおもむきがある。こちら側からは岩峰が三つになって見えたが、その形も仲々いい。あれに登らねばならぬ。私の志はますます堅くなった。そして翌年の夏、私は望みを達してその頂きに立った。」原文まま



トムラウシ山 山頂から北沼を望む ついついヒグマを探してしまいます

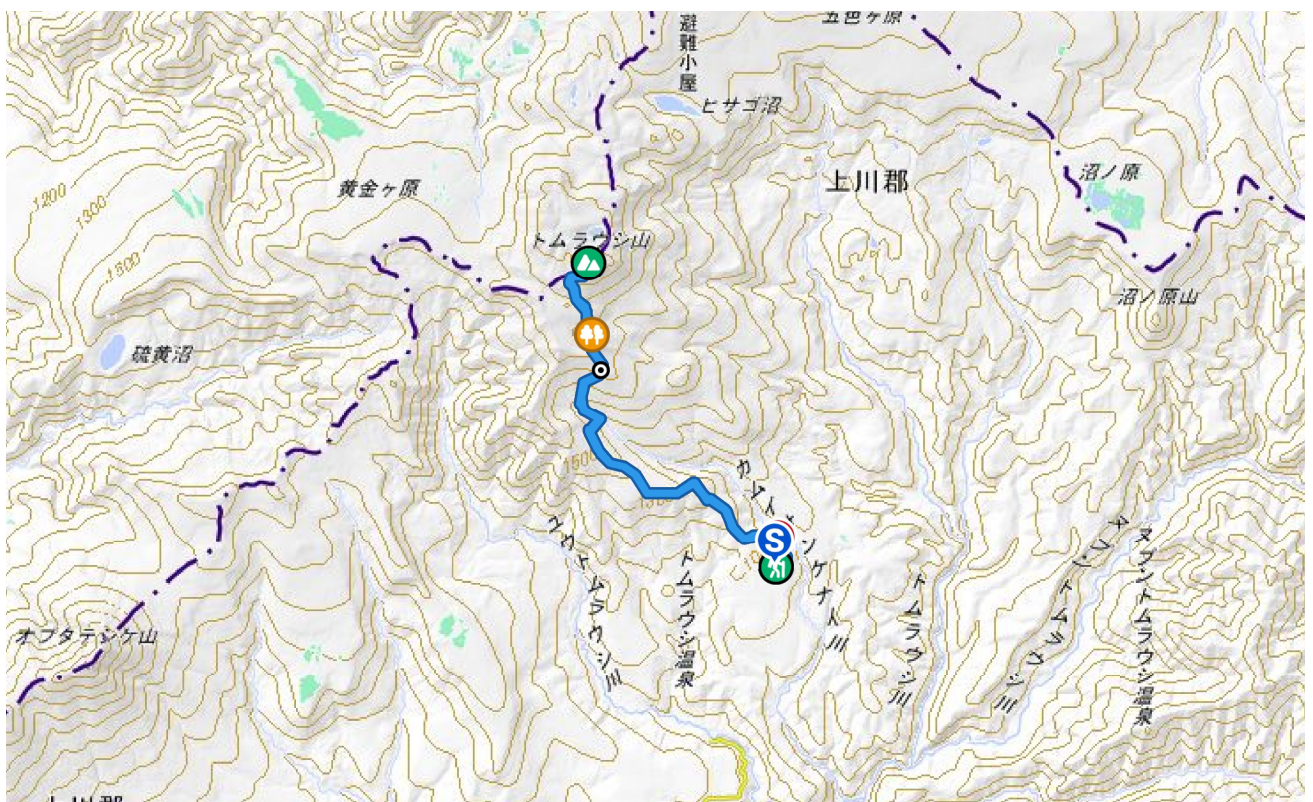
では、今回の登山について報告します。

1日目は福岡空港10:50発、新千歳空港13:20着、そこから空港カウンターでレンタカーの受け付けをして、毎回のことですが、護送船団方式でレンタカー店に運ばれます。

レンタカーを借りた後は、一路、今晚の宿がある帯広市に向かいます。空港から帯広までは約160km 2時間のドライブです。知らない土地（あまり行かない場所）をドライブするのはいつもワクワクしてしまいますし、それが北海道なら尚更です。北海道の大自然、いつ来ても本当に良いものです。



出典:ヤママップ地図



登山データ：距離 17.0km 累積標高上り 1,522m 登山区分 日帰り (ヤママップのデータを転記)

さて、宿に到着後は、翌日2時半には出発するので近所のスーパーに登山のための食料や飲料水を買出しに行きました。そのついでに、近くのラーメン屋で味噌ラーメンを注文し晩ご飯とします。翌日は2時に起床、移動時間が長いので着替えだけして、食事は車を運転しながらとりました。登山口までは帯広市内から2時間と少し、距離にして95kmとなります。十勝平野に位置する帯広市は、とにかく道が真っすぐで広く、暗い中であれば10個先の信号まで見通せます。また、深夜という事もあり、街中でキタキツネを発見、その先でもキツネだけでなく、何十頭のエゾシカと遭遇、一度は衝突寸前でした。

トムラウシ山の登山口までは、市内を過ぎればずっと農地、そして山ばかりです。途中からは未舗路となり、ヒグマの出没も期待されます。ただ、絶対に自分の車では来たくないような悪路でした。午前5時前、登山口に到着するともうすでに30台以上の車が駐車しており、しかもほとんどの方が出発されています。標準コースタイムが10時間、距離17km、ヒグマがいる地域でテント泊する強者もいますが、ほとんどの人は日帰りの為、日の出直後に出発します。

私自身、この状況にニンマリ、ヒグマ多発地帯であるこの山域、多くの登山者が先行してくれていることは登山をする上で精神安定上、かなり優位になります。

駐車場で一緒になった千歳市在住の男性と少し話をしましたが、ヒグマが怖いので、熊撃退スプレーにサバイバルナイフを腰に下げ、アルプスの少女ハイジに出てくるヤギにつけてあるようなガランゴロンと大きな音がする鈴を装備しており、普通の熊鈴と熊逃避剤しか持っていない私は、なんだか竹やりで戦車に突っ込むような気分です（熊スプレーは飛行機には持ち込めません）。



トムラウシ短縮登山口駐車場



登山口です、必ず登山届は提出しましょう

さて、登山道前半は非常に緩い樹林帯の道、それから少し登山道ぽくなり上るのですが、そこから一気に下り、気分的には振り出しに戻るです。但し、この先からは急勾配+絶景のオンパレードで、正直、今まで登山した山の中で一番好きな感じです。前トム平からの壮大な景色、そしてその先のロックガーデンや言葉にならない美しい登山道、トムラウシ公園（ヒグマ目撃多発地帯）と呼ばれる場所の自然の造形美、そして山頂へ続く急登から鳥海山の山頂にも似た岩ゴツゴツの風景。また、そこから見える残雪や北沼、そして大雪山系の山々、この素晴らしさは写真や動画では絶対伝わらない、その場にいる者だけが感じられる深山の大自然です。吹き抜ける風の心地良さも相まって、山頂でしばしの休憩、十分にトムラウシの山頂を堪能した後は、一気に下山しました。



前半は緩い登山道 カムイ天上：名前が素晴らしい



少し登ると雲海が広がります



遥か遠くに山頂が見えてきました



森林限界を越えるとお花畑です



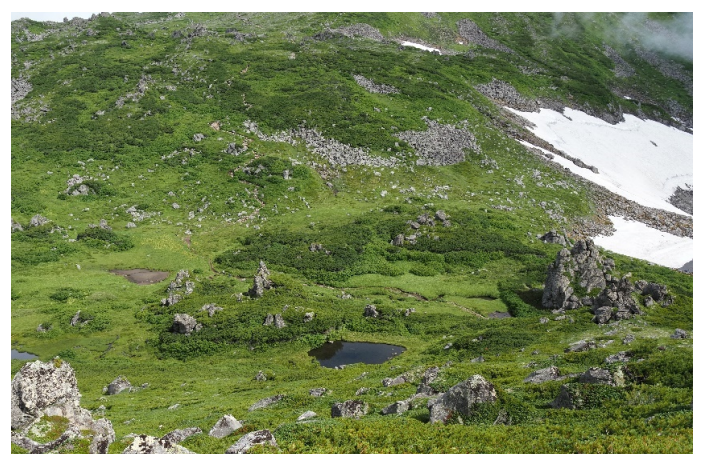
ガレ場をトラバースします



どこまでも歩きたくなる美しい風景



トムラウシ山の山頂が近づいてきました



眼下にはトムラウシ公園



山頂までラストスパート



いやはや、美しい



振り返ると美しい光景が広がる



山頂に近づくにつれゴツゴツの岩場になります



山頂直下は意外と急登



無事に山頂へ到着です

トムラウシ山は、登山口までのアプローチ距離も長く、またヒグマを常に意識する山域ですが、本当に登って良かったと心から思える山でした。

北海道の山は、本州や九州とはまったく違った様相で、人の手のまったく入っていない大自然を堪能できます。広い北海道は本当の深山を体験できる数少ない場所なのではないでしょうか？

下山後は、ホテルでシャワーを浴び、近所の居酒屋で美味しい食事とお酒を頂きながら、今日の登山を振り返り余韻にずっと浸っていたのは言うまでもありません。